川合東野遺跡

二〇〇八・三　岐阜県　可児市教育委員会

川合東野遺跡

2008.3

岐阜県 可児市教育委員会

川合東野遺跡

2008.3

岐阜県 可児市教育委員会

例　　言

1．可児市川合字東野2791番242における（川合）東野遺跡（21214‐07505）の緊急発掘調査報告書である。川合東野遺跡は集合住宅建設に伴うもので、遺跡の有無や範囲を確認するための試掘調査を経て、本調査に至っている。調査面積は合わせて約330㎡である。

2．試掘・発掘調査の現場作業は平成16年度に実施し、整理・報告書刊行作業はその後断続的に平成19年度まで実施した。

試掘調査部分については、既に平成17年度に報告している（『可児市市内遺跡発掘調査報告書2006.3』）が、本発掘調査の結果とも切り離せないものであり、本書にその内容も合わせ含んでいる。

尚、現場調査及び整理作業は、いずれも可児市教育委員会が直営で実施した。

3．発掘調査の体制は、次のとおりである。

教育長　井戸　英彦
教育部長　武藤　隆典（平成16・17年度）　大澤　正幸（平成18・19年度）
文化振興課長　藤田　禮三（平成16年度）　山口　哲（平成17～19年度）
文化財係長　長瀬　治義
調査担当者　吉田　正人
調査補助員　成尾　孝子　本田　博志
作　業　員　押井　正行　可児　定夫　香田　公夫　五木田　かち子
土田　晃司

4．本書の編集は吉田正人と長瀬治義が行った。19年度に吉田君の急逝という悲しい事態があり、彼の業績をまとめるために執筆は長瀬が行った。また、掲載写真の選択とレイアウト、遺構関係図面のトレースは吉田が、遺物の整理は成尾孝子と本田博志が、土器の実測とトレースは成尾と長瀬が、石器の実測とトレースは長瀬が、遺物の写真は吉田が担当している。

5．発掘調査に当たっては、次の方・関係機関にご協力を賜りました。記して謝意を表します。

小島浩二　佐合硝子㈱　積水ハウス㈱名古屋北営業所　（敬称略　順不同）

6．調査記録及び出土遺物は、可児市教育委員会（可児郷土歴史館）で保管している。

目　　次

例　言
目　次
第１節　調査の経緯……1
第２節　遺跡の立地と環境……2
第３節　遺構と遺物……6
第４節　まとめ……27
図　版……28
報告書抄録……39

第１節　調査の経緯

１．試掘・確認調査の経緯と経過

試掘・確認調査は、平成16年11月21日～12月３日まで、約180㎡の面積を実施した。調査はバックホーで荒掘りした後、人力により精査している。

内容の詳細は、平成17年度に刊行している『可児市市内遺跡発掘調査報告書（平成12～16年度分）』（2006.3）に譲るが、設定した３本のトレンチにおいて古墳時代後期の住居址の一部やピット群が検出された。他の住居址の存在も推定され、ピット群は掘立柱建物址の柱穴列となる可能性もあることから、引き続き本発掘調査へ移行することになった。

調査は、試掘確認・本発掘調査共に吉田正人が担当した。

関係法令等に基づく試掘・確認調査の諸手続きは、次のとおりである。

事業者発	平成16年11月15日付		市教委宛	試掘調査の申請
市教委発	平成16年12月６日付	教文振第124号	事業者宛	試掘調査の結果報告
市教委発	平成16年12月６日付	教文振第125号	県教委宛	試掘調査の終了報告

２．本発掘調査の経緯と経過

本発掘調査は、試掘確認調査に引き続き平成16年12月10日～12月18日まで実施した。本調査は、試掘段階の３本のトレンチのうち遺構の分布密度が高く、建物の建設が予定される部分（第１・３トレンチ）を拡張する形で実施した。本調査移行後は、全て人力により調査区を拡張し精査している。試掘調査面積も合わせると、最終的な発掘調査面積は約330㎡となった。尚、事業計画にある駐車場用地については、遺構の深度と盛土等の計画を合わせ考え、今回の調査範囲から除外している。

第１・３トレンチの調査区を拡張し遺構検出に努めると、第１トレンチ部分では、部分的に検出されていた１号住居址の約2／3と柱穴列が、第３トレンチ部分では、新たに２・３・４号住居址の一部といくつもの柱穴列、土壙が検出された。またこれらの遺構に伴い、或いは畑作による撹乱を受けた包含層中からは、縄文時代～現代に及ぶ遺物が出土した。

調査後の平面図や断面図は、手書きにより1／20で図化している。

本発掘調査に係る関係法令の諸手続きは次のとおりである。

事業者発	平成16年12月８日付	教文振第126号	県教委宛	発掘（工事）の届出
県教委発	平成16年12月22日付	教文第31号の112	事業者宛	発掘調査指示の通知
市教委発	平成16年12月13日付	教文振第135号	県教委宛	発掘調査着手の報告
県教委発	平成16年12月27日付	教文第35号の16	市教委宛	受理の通知
市教委発	平成16年12月22日付	教文振第135号	県教委宛	発掘調査終了の報告
市教委発	平成17年２月25日付	教文振第169号	可児警察署宛	埋蔵物発見届
市教委発	平成17年２月25日付	教文振第169号	県教委宛	埋蔵物保管証
市教委発	平成18年６月20日付	教文振第67号の10	県教委宛	出土文化財譲与申請
県教委発	平成18年７月13日付	教文第138号の16	市教委宛	出土品譲与通知

第2節　遺跡の立地と環境

１．立地と環境（図１・２）

川合東野遺跡は可児市の中央北部に位置し、行政区として岐阜県可児市川合字東野地内に所在する。この東野地内では、過去の農作業等により土師器等の遺物が断片的に見つかっているものの、面的な発掘調査の履歴がなく、その内容と性格の詳細は現在に至るまで不明のままである。遺物の散布状況も定かではないが、木曽川に沿って更に東へ広がる可能性がある。

当所は木曽川左岸の低位段丘面の河岸にあり、飛騨川との合流点南側に位置している。河岸には位置するものの、眼下を流れる木曽川は崖を成しており、その水面との比高差は16m程もある。また、調査地の標高は約86.3mを測り、付近一帯は極めて平坦な地形となっている。

この低位段丘面、川合地内には岩宿時代～近世に至る数多くの遺跡が知られており、正に埋蔵文化財の密集地と言える。

今回の調査場所から200m程西側にある川合大橋付近には川合遺跡が知られており、昭和48年と平成２年に発掘調査された。この辺りは古墳時代後期を中心とした集落址であるとともに、江戸時代後期には、木曽川の水運を生かして川湊へ降りる荷（主に陶器類）の集積施設があったようだ。今回の調査地点とは一連の遺跡である可能性もある。

川合大橋付近から西へ500m程の間には、古墳時代後期に造営された川合古墳群が立地している。既に消滅したものの聞き取りも含め32基が数えられたが、古地図によると60基にも上る。このうち、昭和49年と平成２・３年、平成９年には合計で古墳20基が発掘調査されている。７世紀初頭に築造された川合次郎兵衛塚１号墳（一辺29.5mの二段築成方墳）もこれに含まれ、川原石積みによる横穴式石室築造技術集団の一大拠点であったようだ。この次郎兵衛塚１号墳に先んずる首長墳としては、かつて川合地区の最東端に選地する狐塚古墳が存在した。墳長63m程度の前方後円墳であり、他の古墳とは一つポツンと離れた立地状況である。

また、次郎兵衛塚１号墳を含む川合古墳群の主要部は、古墳時代全般から古代、中世に至る集落址でもあった。宮之脇遺跡名鉄地点や宮之脇遺跡A地点などと呼ばれ、昭和49年と平成２年には、100基を優に超える竪穴住居址が小範囲から密集して検出されている。

青木神社周辺の宮之脇遺跡名鉄地点から西方向へかけては、縄文時代中期後半を中心とした集落址である。宮之脇遺跡B地点と名付けられ、平成２年には竪穴住居址が20基程見つかっている。また、この地点ではナイフ形石器など岩宿時代の遺物も出土している。

このように、木曽川に沿った当地区は、その地の利を得て太古の昔から土地利用が著しい。

参考文献　可児町教育委員会『宮之脇遺跡発掘調査報告書』　1976

可児町教育委員会『川合遺跡発掘調査報告書』　1978

可児市教育委員会『川合遺跡群』　1994

可児市教育委員会『可児市市内遺跡発掘調査報告書（平成７～11年度分）』　2000

可児市教育委員会『可児市市内遺跡発掘調査報告書（平成12～16年度分）』　2006

可児市『可児市史』第１巻　通史編　考古・文化財　2005

可児市教育委員会『可児市市内遺跡発掘調査報告書（平成17～18年度分）』　2008

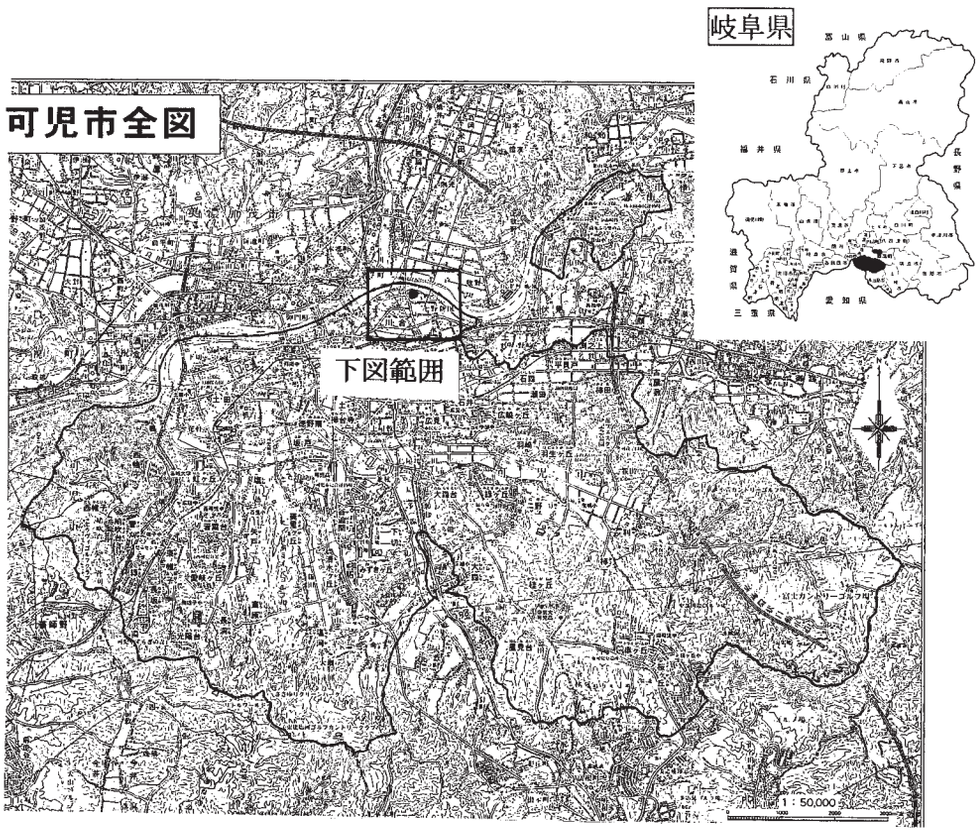

図１　調査場所の位置と川合古墳群

図２　調査場所周辺の地形図

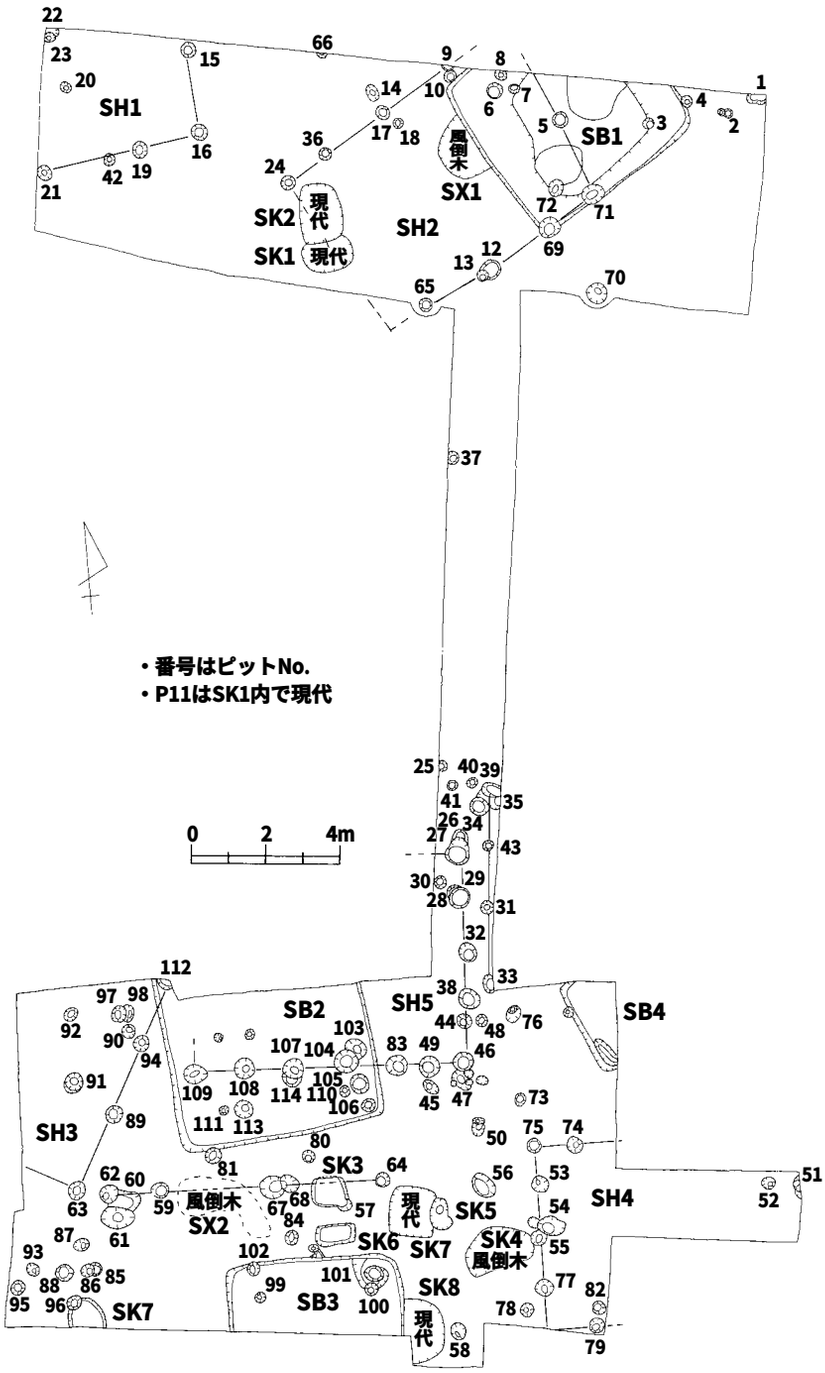
・番号はピットNo.
・P11はSK1内で現代
0 2 4m
SH1
SH2
SH3
SH4
SH5
SB1
SB2
SB3
SB4
SX1
SX2
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
現代
風倒木

図３　調査区遺構配置図

第3節　遺構と遺物

１．層　序（図４）

本調査地は木曽川の低位段丘面に立地し、畑地として利用されていた。河岸段丘そのものは第四紀の初め（約150万年前）に形成されたものであるが、その上層には、黒色を呈する約27,000～30,000年前に木曽御岳の爆発で噴出した、火山灰泥流（通称「黒ボコ」と呼ばれる黒色土）が堆積して露頭し、平坦な地形となっている。地表面の標高は約86.3mを測る。

図４を代表とした標準的な層序は、この黒色シルト層が約40～60㎝の厚さを持ち、その下に段丘堆積物である黄色砂質土層がある。そして更にその数10㎝下には川原石層が厚く堆積している。しかし、黒色シルト層の過半以上は畑作等により撹乱を受け淡黒色を呈する（①層）ことが普通であり、撹乱を受けていない黄色砂質土層（地山）との境目付近では黒色や黒褐色を呈している（②層）。

この畑作等による撹乱があるため、竪穴住居址等の遺構は黒色シルト層中では面的に捉えることが難しく、遺構のほとんどはその下の黄色砂質土層（地山）上面やその直上（②層）で検出できる。すなわち、地表面から遺構検出面までの深さは40－60㎝程となる。したがって、掘削深度が地山付近にまで届かず、この範囲内の深さに収まる遺構があったとしても検出は不可能ということになる。

検出された１号住居址に見る覆土（⑧層）は、淡黒褐色を呈してよくしまり、地山の黄色砂質土の粒子を含んでいる。また、住居址床面の敷土（⑥・⑦層）には黄色砂質土と黒色土が混ざり合っており、堅く突き固められている。柱穴等のピットや土壙については、古代や中世まで遡るものの覆土は、黒色土もしくはこれに黄色砂質土の細かい粒子少し含むものがほとんどでよくしまり、大粒の黄色砂質土が多く混じり比較的軟らかい近現代のものとは明らかに異なっている。

２．竪穴住居址（図３～６・13・14、表１～４）

調査区全体図や各住居址の個別図、出土遺物実測図、ピット一覧表、出土遺物観察表などを参考に、遺構と遺物の概要を述べる。

１号住居址（SB1）

遺　構　調査区の北側、試掘段階の第11トレンチ内で検出され、その後調査区の拡張により住居址全体の約2／3を検出した。住居址の軸は北西－南東もしくは北東－南西を向いている。その平面はほぼ正方形で、検出面では北西－南東4.9m×北東－南西5.2m、床面では北西－南東4.7m×北東－南西5.0mを測り、検出面から床面までの深さは10㎝程度である。床面には、貼床された部分が住居址の中央約3.3×3.2mの範囲でよく遺存し、その中でも非常に硬化した部分が南側と北側で見られた。

住居の主柱は４本で、その内３本の柱穴（Ｐ３、Ｐ６、P72）を検出している。これらの柱穴は直径20～45㎝程度、下面２－30㎝程で、床面からの深さは64～72㎝、柱間距離はどちらの間隔も3.1mを測る。西－北辺か北－東辺のどちらかにカマド施設が設けられていると推定されるが、調査区外であり未検出である。また、主柱の穴であるＰ６の覆土上部はよくしまっているが、その下方はやわらかく黄色の砂質土層であることが確認できた。

その他のピットＰ５、Ｐ９、P71、P69は後述する２号建物址に伴う柱穴で、後２者は１号住居址の掘型を切っており本住居が先行する。

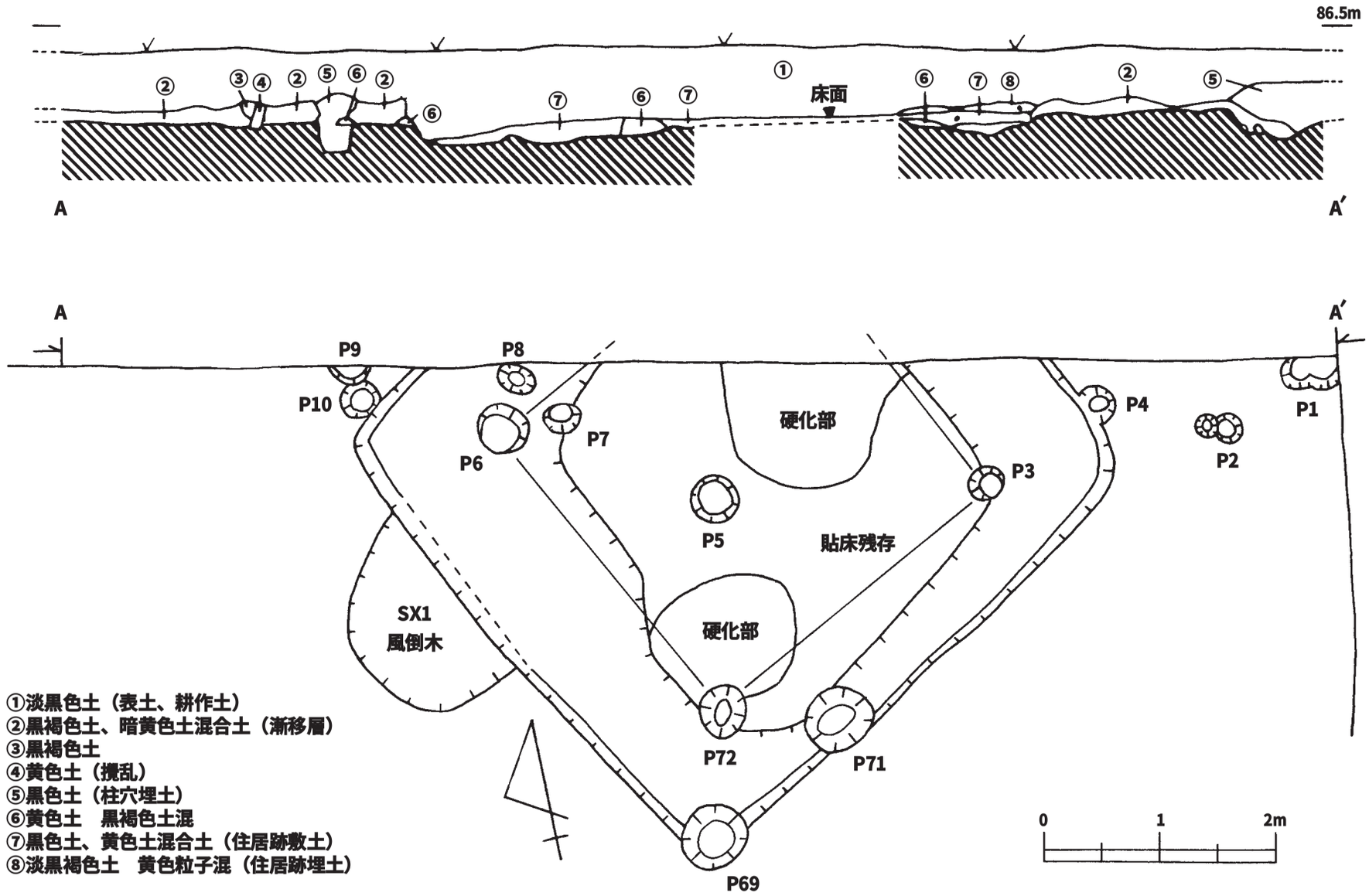
86.5m
床面
A
A′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P69
P71
P72
硬化部
硬化部
貼床残存
SX1
風倒木
0
1
2m
①淡黒色土（表土、耕作土）
②黒褐色土、暗黄色土混合土（漸移層）
③黒褐色土
④黄色土（攪乱）
⑤黒色土（柱穴埋土）
⑥黄色土　黒褐色土混
⑦黒色土、黄色土混合土（住居跡敷土）
⑧淡黒褐色土　黄色粒子混（住居跡埋土）

図４　１号住居址実測図

遺　物　遺物は浅い覆土と床面から出土しているがほとんどは細片で、図化できたものは２点、図13と14に示す床面の土師器・甕と覆土中の焼塩土器、そして縄文時代の遺物３点のみであった。覆土からの出土遺物破片数を示せば、土師器類は焼塩土器片122、甕片８、須恵器類が壺片１、甕片１などの他、縄文土器の細片１、打製石斧片１点が出土した。また、確実に床面から出土したものは、１の土師器・甕片と焼塩土器１片のみではある。焼塩土器の胎土は緻密で器壁は薄く、口縁部外方へ吹きこぼれのような痕跡が見受けられる。過去の調査において、川合宮之脇遺跡A地点で多数見つかっているものと違和感はない。更に、この住居址の掘型からも焼塩土器片２、土師器・甕片５の他、混入した縄文土器片１、打製石鏃１、打製石斧１が出土した。この付近にある縄文時代の遺跡の存在を予想させる。

１の土師器・甕は長胴ではないと思われ、市内川合遺跡群の編年観では後Ⅵ期（７世紀中頃）にあたる。主に覆土中から多く出土した焼塩土器は、川合宮之脇遺跡A地点では後Ⅴ期（７世紀前半）～Ⅹ期（８世紀末）にかけて出土例がある。両者を合わせて考えれば、本住居址は川合遺跡群編年後Ⅵ期（７世紀中頃）に所属するものと推定される。

37の打製石鏃は掘型出土で、赤褐色チャート製、凹基、長さ2.0㎝強である。38の打製石斧は覆土出土、40は掘型出土で長さ12.3㎝、幅4.3㎝を測り、いずれも粘板岩製である。

２号住居址（SB2）

遺　構　調査区の南側に位置し、試掘段階の第３トレンチにはかからなかったが、その後の本調査による調査区の拡張で住居址全体の約3／4を検出した。住居址の軸は南－北方向で、平面は方形を呈する。検出面では南－北4.8m以上×東－西5.5m、床面では南－北4.7m以上×東－西5.2mを測り、検出面から床面までの深さは30㎝程度で地山まで達している。床面には、地山である黄色砂質土の面に敷土をし貼床された部分が、住居址のほぼ全体によく遺存していた。

住居の主柱は４本と見られ、その内２本の柱穴（P110、P111）を検出している。これらの柱穴は直径25～30㎝程度、下面10～14㎝程で、床面からの深さは10㎝と浅いものの、２つの主柱穴の底面は標高約85.1mとよく揃っている。また、東西の柱間距離は3.25mを測る。おそらく住居址の北辺にカマド施設が設けられていると推定されるが、調査区外であり未検出である。

その他のピットのうち、少なくとも直列するP83、P104、P107、P108、P109は後述する５号建物址に伴う柱穴で、後４者は２号住居址の床面を切っており本住居が先行する。尚、P104やP107からは、この柱穴掘削や立柱に伴う攪乱により混入したとみられる土師器片が出土している。

遺　物　遺物は覆土や床面から出土しているがほとんどは細片で、図化できたものは図13に示す11点のみであった。覆土からの出土遺物破片数を示せば、土師器類は焼塩土器片49、甕片321、甑片１、土錘１など、須恵器類が壺片１、甕片１、坏類片21、高坏片４、鉢片１、瓶類片２など、混入した縄文時代遺物は打製石斧片１、土器片１、その他白瓷碗片２、山茶碗片10である。また床面から出土した破片数は、土師器類が焼塩土器片３、甕片46、須恵器類は坏類片４、高坏片１、器台１個体（図版９）など、そして縄文土器片が１である。

図13に示した遺物の３は、美濃須衛編年のⅣ期第１小期（８世紀前半）に属する須恵器・坏C身で、７も同期の鉢、６は８世紀代の坏D蓋、４は６世紀代の尾張系須恵器・坏A身、５も同期同系の高坏蓋とみられる。また、８は７－８世紀の土師器・長胴甕の口縁で、９と10も市内川合遺跡群の編年観では後Ⅷ～Ⅸ

期（８世紀前半）にあたる長胴甕の胴部、11は後Ⅶ期（７世紀末）にあたる土師器・小型甕の底部である。また、12と13は手捏ねの薄手作り、胎土が緻密な焼塩土器の口縁部で、当地域では後Ⅴ期（７世紀前半）～Ⅹ期（８世紀末）に例があり、14は長さ4.9㎝で土師質の管状土錘である。

１号住居址同様、土師器・甕と焼塩土器の破片数の多さが目に付く。木曽川の水運を活かした荒塩の搬入と、当地における焼き塩による精製（堅塩づくり）作業は想像に難くない。上記遺物の出土位置（覆土か床面か）も含めて考えれば、本住居址は川合遺跡群編年の後Ⅷ～Ⅸ期（８世紀前半）に所属するものと推定できる。

４・５に示した６世紀代の遺物や写真図版に掲げた６世紀前半の須恵器・器台については、周辺からの混入によるものと考えざるを得ない。

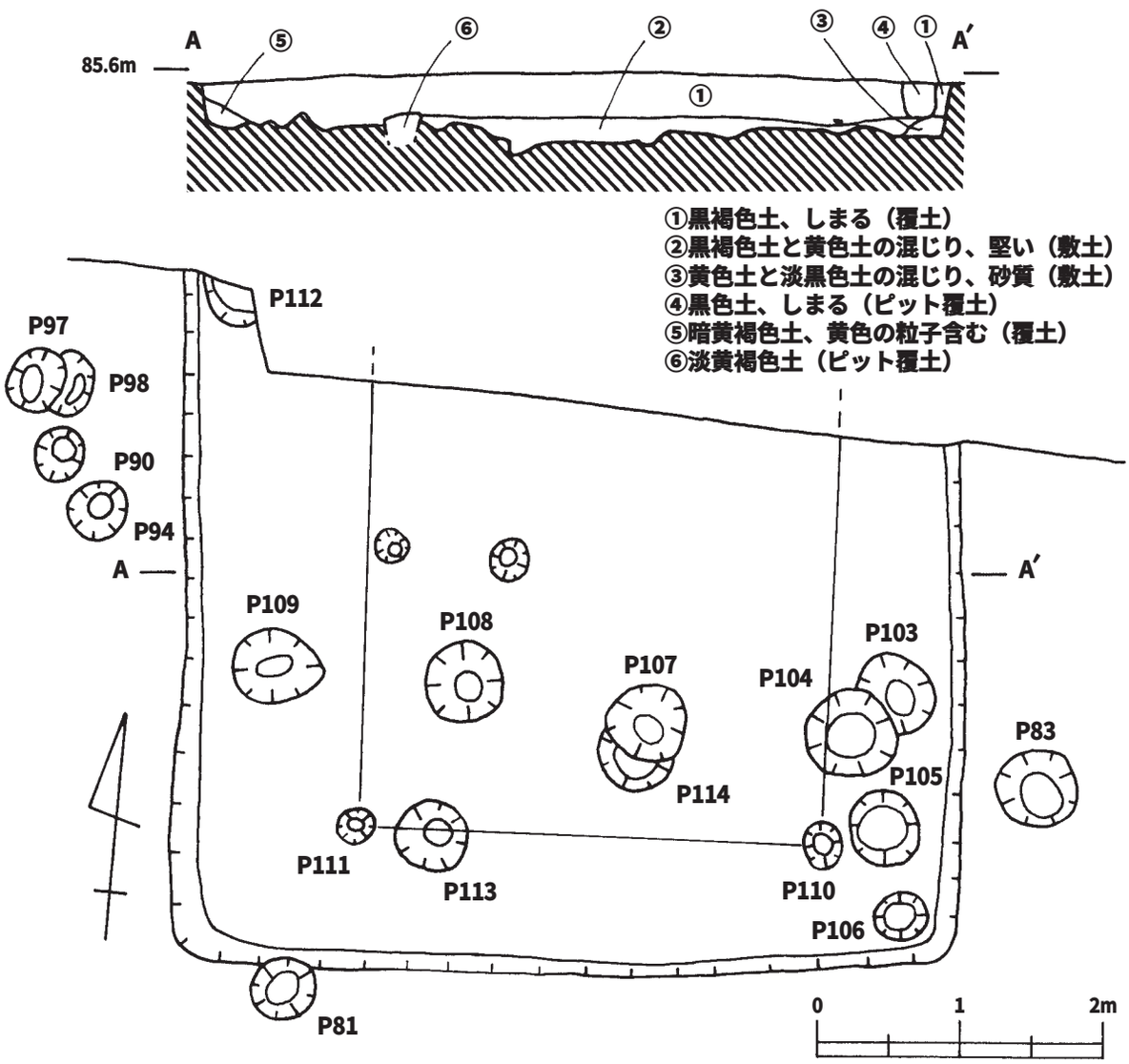

図５　２号住居址実測図

３号住居址（SB3）

遺　構　調査区の南の端に位置し、試掘段階の第３トレンチにはやはりかからなかったが、その後の本調査による調査区の拡張で住居址全体の約1／2を検出した。住居址の軸は南－北方向で、２号住居址とほぼ軸が合っており平面は方形を呈する。検出面では南－北2.2m以上×東－西4.7m、床面では南－北2.1m以上×東－西4.5mを測り、検出面から床面までの深さは２－30cm程で地山まで達している。１号・２号住居址に比べるとやや小型である。床面には、地山である黄色砂質土の面に薄く貼床された部分が、住居址のほぼ全体によく遺存していた。

住居の主柱は４本とみられ、その内２本の柱穴（P99、P100）を検出している。この２つの柱穴は上面直径30～35cm程度、下面９～17cm程で、床面からの深さは50cm程と深く、２つの主柱穴の底面は標高約84.7mとよく揃っている。また、東西の柱間距離は3.0mを測る。住居址の北辺中央部ではカマド施設の痕跡である被熱部分が見つかり、北東角部分では本住居址に伴う貯蔵穴らしきピット（P101）を検出した。貯蔵穴の深さは床面から約50cmもあり、覆土は黒色土を基本として非常によくしまるが、下部では黄色砂質土のブロックが混じっている。住居址の北辺西側にあるP102は明らかに住居址の掘型を切っており、この住居以後であるものの時期不明である。

遺　物　遺物は覆土や床面から出土しているがほとんどは細片で、図化できたものは図13に示す６点のみであった。覆土からの出土遺物破片数を示せば、土師器・甕片４、須恵器類が坏類片３、鉢片２（16・17）の他、混入した縄文時代遺物の土器片１である。また床面のカマド周辺から出土した破片数は、土師器・長胴甕片８と復元可能な１個体（20）、小型甕２個体（18・19）などである。19の小型甕は、貯蔵穴出土の破片とも接合している。

図13に示した遺物の15は、８世紀代に属する須恵器・坏C身で、16と17も同期の鉢、18と19の土師器・小型甕は、市内川合遺跡群の編年観では後Ⅶ～Ⅷ期（７世末～８世紀初頭）に属する。20の長胴甕も、平底の状況や胴部上半で最大径をとるプロポーションから、同様の時期であろう。これらの遺物から、本住居址は７世末～８世紀初頭に所属するものと推定される。

４号住居址（SB4）

遺　構　調査区の南東の端に位置し、試掘段階の第２・３トレンチにはかからなかったが、その後の本調査による調査区の拡張で方形を呈する遺構を検出した。住居址に間違いないとすれば、全体の約1／3程度の検出状況とみられる。住居址の軸は北西－南東もしくは北東－南西を向いており、１号住居址とほぼ軸が合う。検出面では北西－南東方向の辺が約2.6m、床面では2.45mを測り、検出面から床面までの深さは10cm程で地山まで達している。他の住居址に比べるとかなり小型である。住居の主柱痕は見つかっていないが、住居址の南角付近では住居の壁際に浅い溝の一部が検出されている。

遺　物　遺物は浅い覆土から細片が少量出土しているが、図化できたものは図14に示す２点だけである。覆土からの出土遺物破片数は、土師器・甕片７、須恵器類が坏1（21）、甕片１である。

21は、美濃須衛編年のⅣ期第１小期（８世紀前半）に属する須恵器・坏B身で、外面底部にヘラ記号とも考えられる沈線がある。22の土師器・甕は、市内川合遺跡群の編年観では後Ⅶ～Ⅷ期（７世末～８世紀初頭）に属する感が強い。本住居址は８世紀前半に所属するものと推定される。

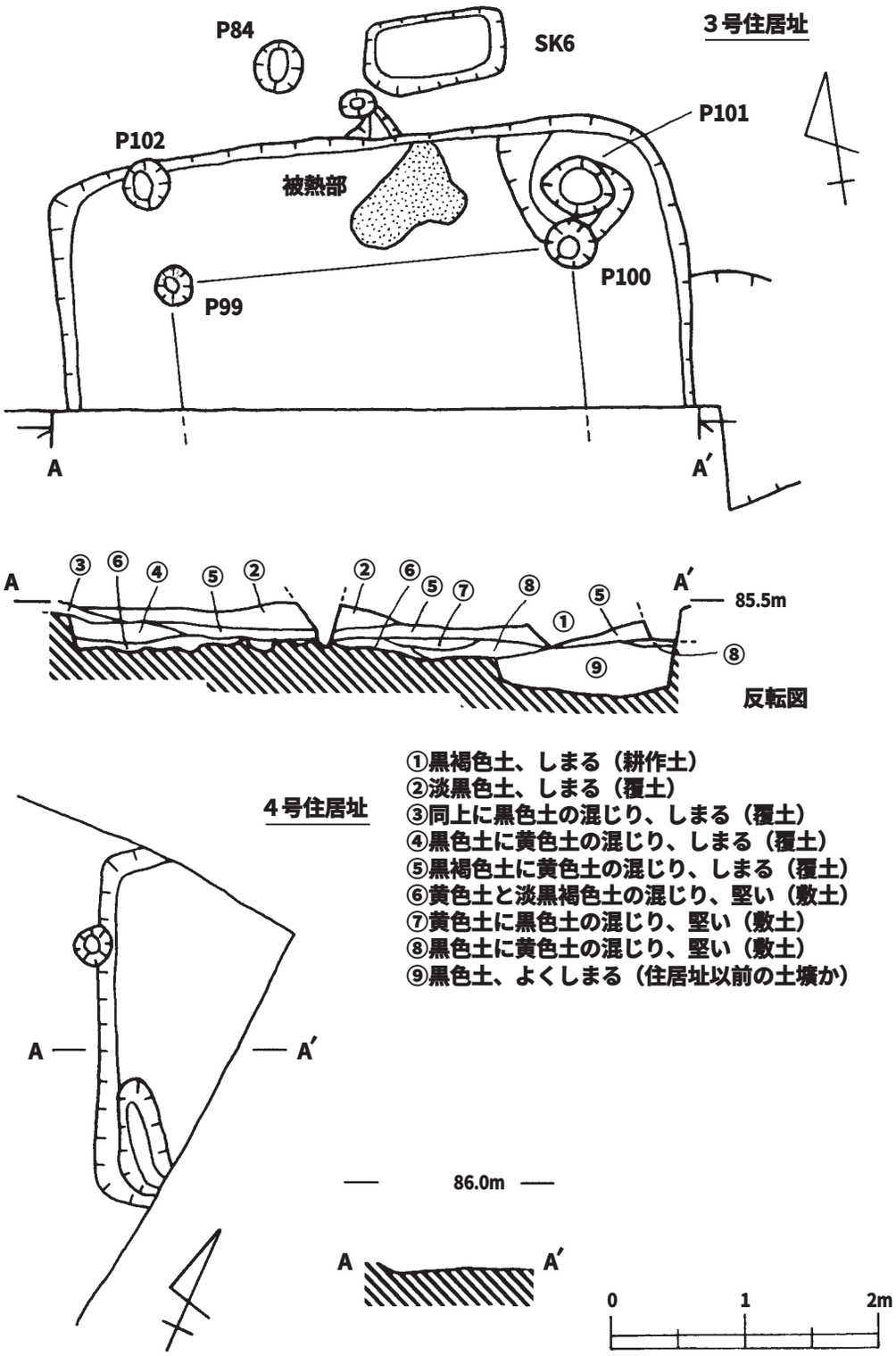

図６　３号・４号住居址実測図

３．掘立柱建物址など（図３・７～11・14、表１～４）

１号建物址（SH1）

北側調査区の北西角部分で方形をなす柱穴列を確認した。軸を東－西と南－北に採る掘立柱の建物址と考えられる。南北辺のP15とP16の柱間距離は2.2m、東西辺のP16－P19間は1.65m、P19－P42間は0.85m、P42－P21間は1.75mと不整間隔に配置される。

各柱穴の径は、検出面ではP42が約30cmでその他は40cm内外、穴の底面ではP21とP42が約14cmでその他が22cm内外である。検出面からの深さは31～52cmで、しっかりした柱穴の感がある。各穴の平面や半截調査の観察によると、P16では黒色土に黄色土が混じった柱状の痕跡が認められた他、P21でも同様に柱の抜き取り痕とみられる直径15cmの痕跡を確認、P42では底面が非常に堅い状況が確認できている。

これらの柱穴覆土の遺物としては表１～３に示すが、P42以外から須恵器や土師器の細片が出土しているものの、立柱に伴う掘削や埋土などに由来する流れ込みの可能性が強いと思われる。また、この建物址が検出された第１トレンチ部分からは、遺構に伴わず縄文土器や須恵器、土師器の細片の他、白瓷・碗の破片が８、白瓷・皿が１片、白瓷・壷または瓶類が５片、山茶碗が３片出土している。これらの状況から、本建物址は白瓷（30～34）の所属する平安時代に属するものと推察する。

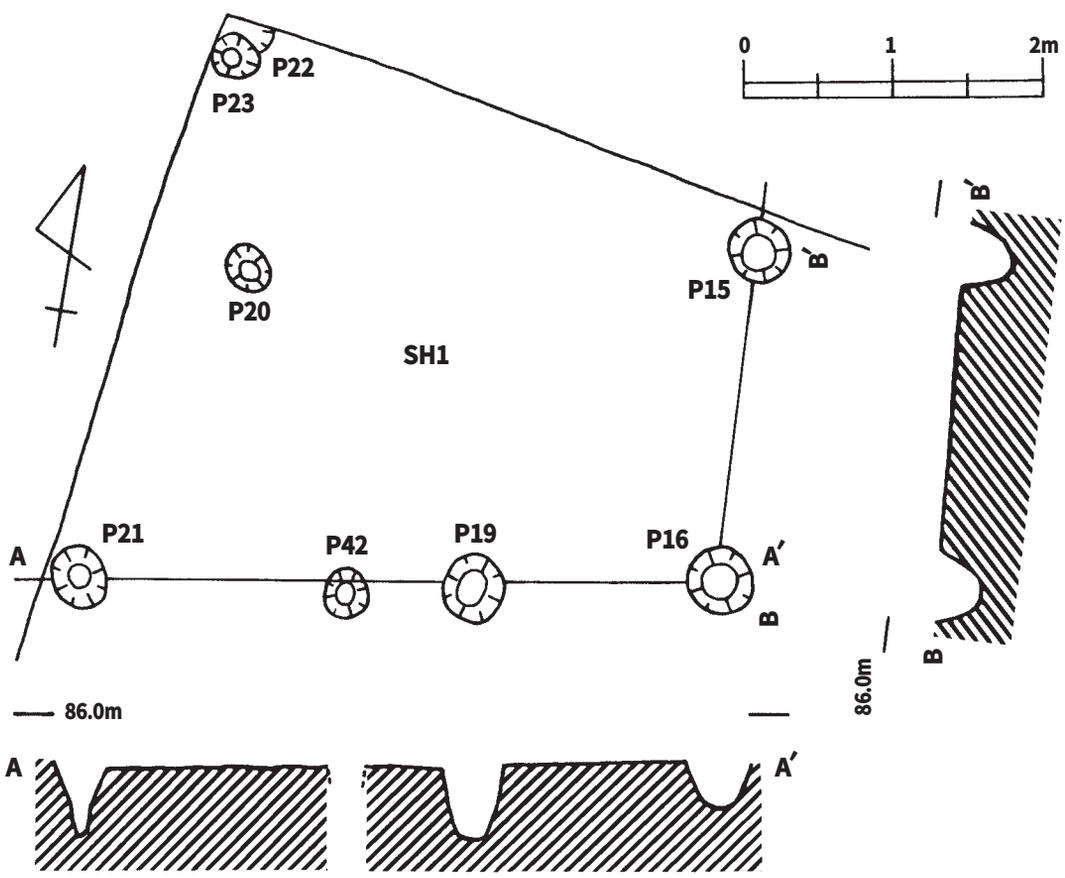

図７　１号建物址実測図

２号建物址（SH2）

北側調査区の中央部分・１号住居址（SB1）に重複し、おそらく２間×４間で方形をなす柱穴列を確認した。長辺の軸は北東－南西を採る掘立柱建物址と考えられ、SB1と同軸である。建物址の北と南角部分については、調査区外であり分かっていない。短辺の長さは4.8～5.0m程であり、Ｐ５とP71の柱間距離は2.2mを測る。長辺の長さは6.6m程と推定され、北西辺各柱穴の柱間距離はP24－P36間が狭く1.25m、P36－P17間が1.9m、P17－Ｐ９間が2.1mを測る。南東辺はP65－P12間が2.0m、P12－P69間が1.95m、P69－P71間は1.5mとやや狭い。このように、長辺においては西角と東角の状況から、角寄りの柱間がやや狭くなっていることが分かる。また、短辺の中間の柱はやや外に開いて配置されているようである。

各柱穴の径は、検出面では34～56㎝、穴の底面では19～41.5㎝、検出面からの深さは12～53㎝と幅広いが、しっかりした柱穴の感がある。また、Ｐ９はP10を、Ｐ５はSB1の貼床を、P71とP69はSB1を切っており、より新しい遺構である。

これらの柱穴覆土の遺物としては表１～３に示すが、P17から土師器や須恵器片が、Ｐ５とP71、P69から土師器の細片が出土しているものの、立柱に伴う掘削や埋土などに由来するSB1覆土などからの流れ込みの可能性が強いと思われる。P71から見つかった焼塩土器の細片もこの可能性を支持する。１号建物址と同様の理由から、本建物址はSB1廃絶以後～白瓷の所属する平安時代に属するものと推察する。

３号建物址（SH3）

南側調査区の北西角部分で、直列をなす柱穴４つを確認した。軸の一つを北東－南西に採る掘立柱の建物址の可能性も高く、３号建物址とした。他の辺は調査区外のため不明であるが、一辺の片側を３間分検出している。P112とP94の柱間距離は1.95m、P94－P89間は2.05m、P89－P63間は2.25mと掘立柱はほぼ等間隔に配置され、建物址としてみれば一辺6.15m以上の規模となる。ただし、建物址ではなく単なる柱穴列の可能性も残る。

各柱穴の径は、検出面では42～47㎝、穴の底面では18～26㎝、検出面からの深さは30～47㎝でしっかりした柱穴であり、かつ底面の標高レベルはほぼ85.0mとよく揃っている。

柱穴覆土の遺物としてはP63から土師器・甕の細片が出土しているものの、やはり立柱に伴う掘削や埋土などに由来する流れ込みの可能性が強いと思われる。また、２号住居址（SB2）と重複するP112はSB2の貼床を切っており、本建物址SH3はSB2よりも新しい。また、この建物址が検出された南側調査区（第３トレンチ部分）からは、遺構に伴わない遺物として須恵器や土師器の細片の他、白瓷・碗の破片や山茶碗がごく少量ではあるが出土している。これらの状況から、本建物址はSB2廃絶以後～白瓷の所属する平安時代、または山茶碗の使用された時代に属するものと推察する。

４号建物址（SH4）

南側調査区の南東角部分で方形をなす柱穴列を確認した。長辺か短辺かは不明であるが、軸を東－西と南－北に採る掘立柱の建物址と考えられる。建物規模は南北4.85mで４間とみられ、北側東西辺のP75とP74の柱間距離は1.1m、南北辺のP75－P53間は0.95m、P53－P55間は1.5m、P55－P77間は1.35mと、掘立柱は不整間隔に配置されている。

各柱穴６つの径は、検出面では38～46㎝、穴の底面では11～26㎝、検出面からの深さは28～64㎝としっ

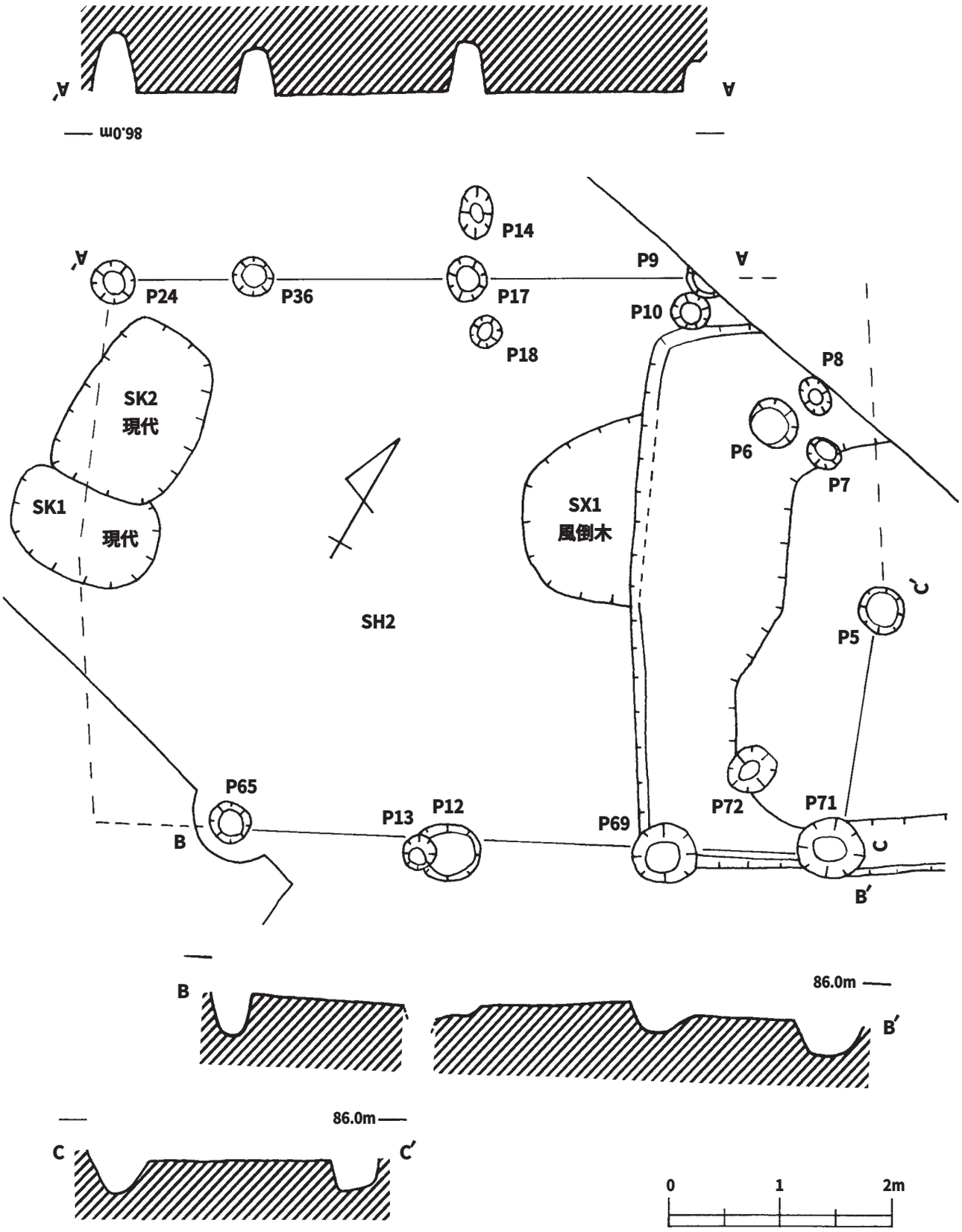
A
A′
86.0m
P14
P9
P24
P36
P17
P10
P18
P8
SK2
現代
P6
P7
SK1
現代
SX1
風倒木
SH2
C
P5
P65
P13
P12
P69
P72
P71
B
B′
86.0m
C
C′
0
1
2m

図８　２号建物址実測図

かりしており、底面の標高レベルの平均は85.0mである。各穴の平面や半截調査の観察によると、P74では覆土の中央に直径13cmの明瞭な軟らかい部分があり、その外側は非常に堅く突き固められている様子を確認するとともに、この軟らかい部分は柱状に穴の下方まで続いていた。これは、掘立柱そのものの抜き取り痕とみられる。また、P55は風倒木痕（SK4）を切っておりこれより新しい。

これらの柱穴の覆土から出土した遺物はないが、SH3と似たような状況から、本建物址は白瓷の所属する平安時代、または山茶碗の使用された時代に属するものと推察する。

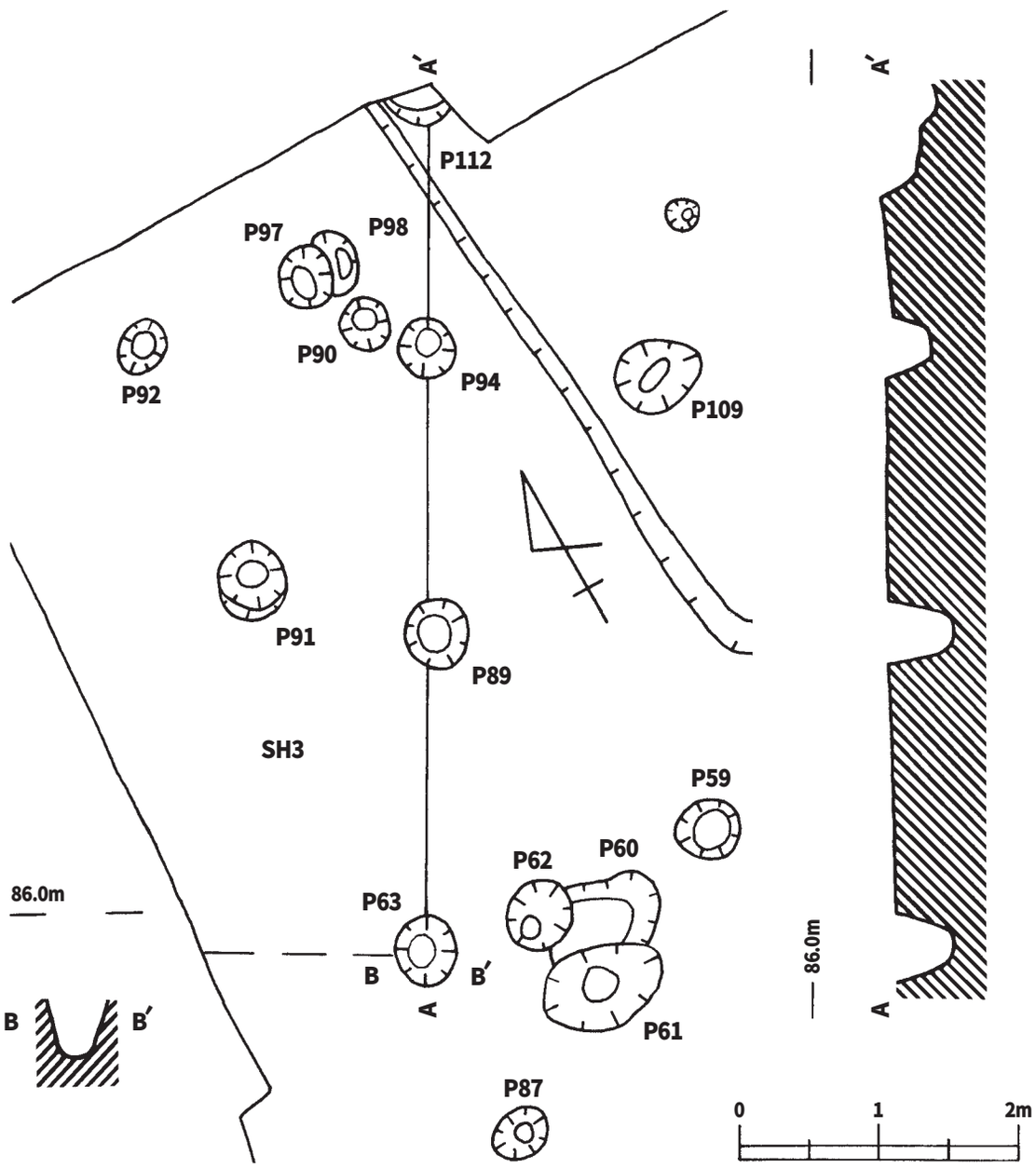

図９　３号建物址実測図

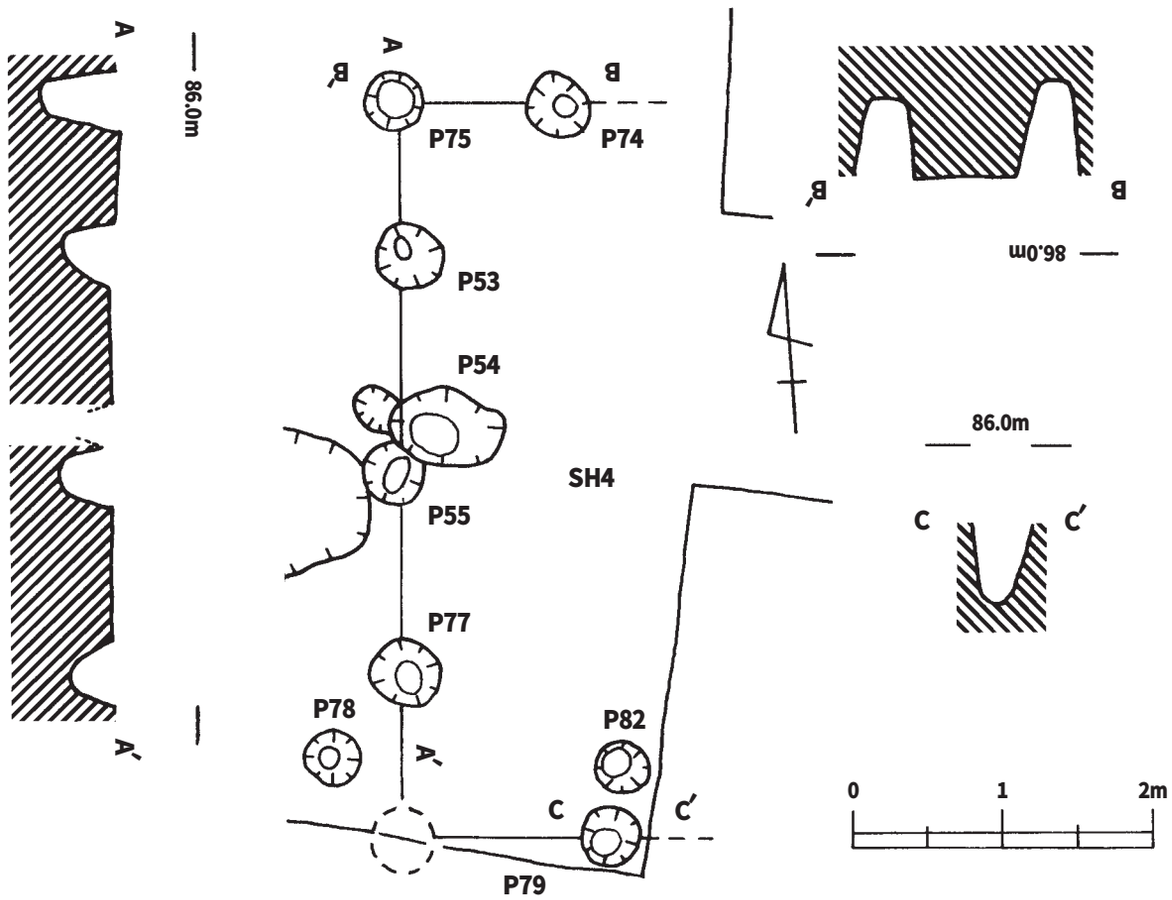

図10　４号建物址実測図

５号建物址（SH5）

南側調査区の中央北部分で、方形をなすとみられる柱穴列を確認した。L字形に並ぶ部分のみの検出であるが長辺と短辺は完結しており、長軸を東－西に採る掘立柱の建物址と考えられる。建物規模は、東西６間または５間（7.3m）×南北４間または５間（5.6m）であり、長辺のP109とP108の柱間距離は1.4m、P108－P107間は1.3m、P107－P104間は1.4m、P104－P83間も1.4m、P83－P49間は0.8m、P49－P46間は1.0mと、西角に近い２間部分以外は柱が均整に配されている。しかし、P49を除いて東西の長辺を５間とすればP83－P46間は1.8mとなる。短辺の柱間距離は、P46－P38間は1.8m（P46－P44間1.1m、P44－P38間0.7m）、P38－P32間は1.15m、P32－P29間は1.5m、P29－P27間は1.15mと、掘立柱は不整間隔に配置されている。

建物の規模を東西5間×南北4間と仮定すれば、柱間距離の単位は長辺1.4m、短辺1.15mを基本としつつも、南東角部分における両辺の柱間は1.8mを採るようだ。また、東西６間×南北５間と仮定すると、柱間距離の単位は長辺1.4m、短辺1.15mを基本としつつ、南東角部分両辺の2柱間は0.7～1.1mを採るようだ。

各柱穴の径は、検出面では49～69cmで平均約57cm、穴の底面では20～45cmで平均約31cm、検出面からの深さは、SB2と重複する柱穴を除けば55～80cmで平均65cmと深く、しっかりした柱穴群である。また、底面の標高レベルの平均は84.85mを測る。各柱穴の覆土はよくしまり、各穴の平面や半截調査の観察によると、P83やP44では覆土の中央部分に直径18cmと19cmの明瞭な柱痕があった。この部分の土は白っぽく変色して硬く、柱状に底面まで達している。また、P83も含め穴の底面は非常に堅く叩き締められていた。廃

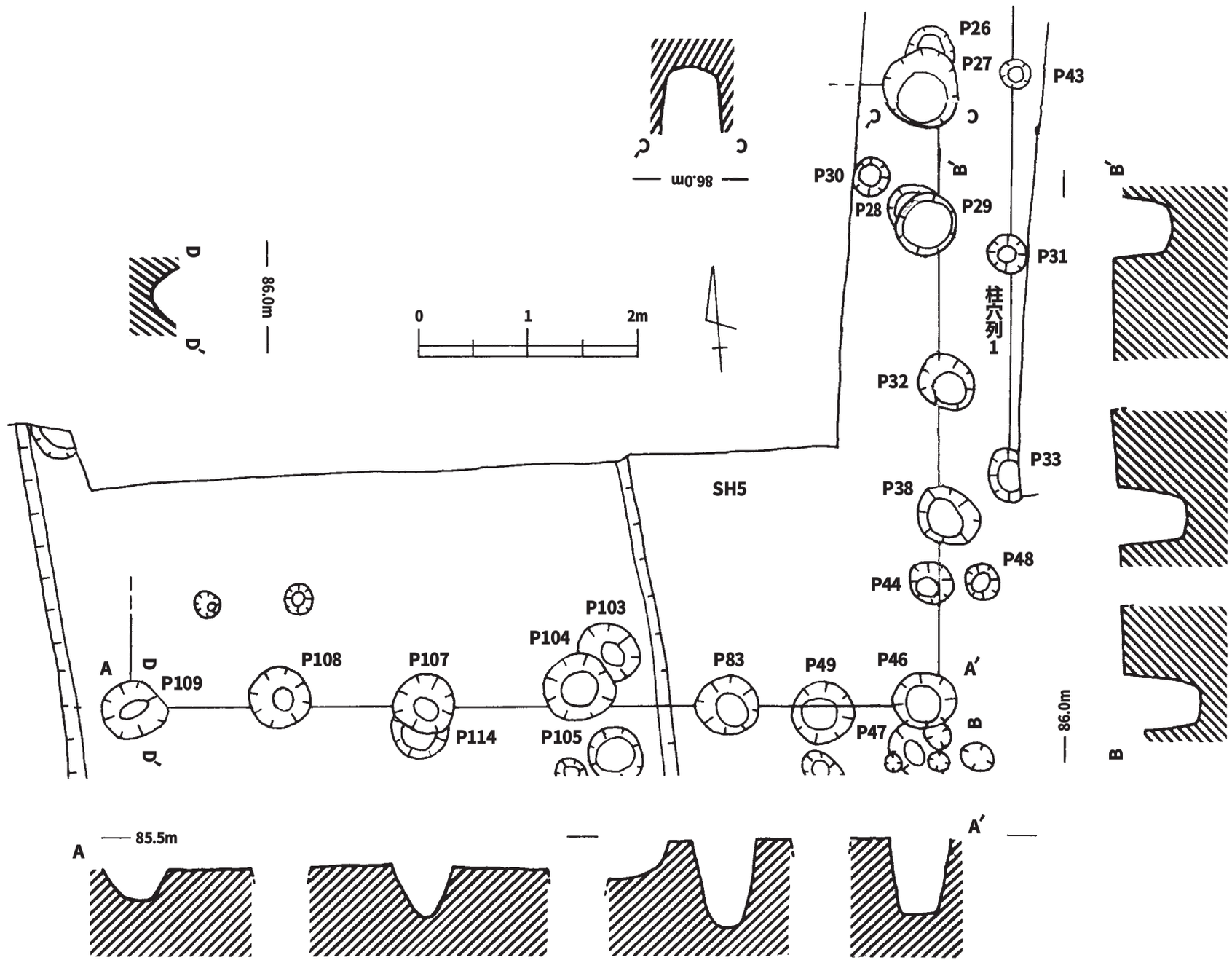

図11　５号建物址実測図

棄された建物の柱は抜き取られずに放置され、朽ちて粘土化したものと推測される。

各柱穴の切りあい関係は、P107はP114を、P104はP103を切っており、P27はP26に切られている。また、SB2と重複する柱穴群はこの住居址の床面を切っており、SB2よりも新しい。そして、P107やP104、P32、P29の覆土からは土師器・甕の細片が出土した。P107やP104はSB2と重複しており、やはり立柱に伴う掘削や埋土などに由来する流れ込みの可能性が強いと思われる。

これらの状況から、本建物址はSH3同様にSB2廃絶以後～白瓷の所属する平安時代、または山茶碗の使用された時代に属するものと推察する。

柱穴列１

試掘調査段階の第２トレンチに当たる南端部分で、直列をなす柱穴４つ（３間分）を確認した。柱穴列の軸はSH5と並行しており、南－北である。SH3と同様の検出状況であり、もし調査区の東側へ柱穴列が広がれば掘立柱建物址となるのであるが、調査区外であり不明である。

P39とP43の柱間距離は1.5m、P43－P31間は1.65m、P31－P33間は2.0mと柱穴列は非等間隔に配置されている。建物址であれば一辺5.15mの規模となる。

各柱穴の径は、検出面では30～50㎝、穴の底面では16～40㎝、検出面からの深さは18～65㎝を測り、底面の標高レベルは84.92～85.49mとばらつきがある。

柱穴覆土の遺物としては、P31から土師器・甕片が出土しているものの、やはり立柱に伴う掘削や埋土などに由来する流れ込みの可能性が強いと思われる。覆土は、P39とP43が黒色土でよくしまって酷似し、P31とP33が淡黒色土に黄色の粒を含んでよくしまり酷似する。遺構の切り合い関係は、P39がP35を切りP34がP35を切る。P35が最も古く、その覆土から土師器・甕片と焼塩土器片が出土している。

本柱穴列は、SH5と並行して並ぶ状況から、SH5と同時に存在したのではないかと推定する。

柱穴列２

調査区の南側（SB2とSB3の間）に当る試掘調査段階の第３トレンチ内で、直列に繋がる少なくとも４つの柱穴を確認した。柱穴列の軸はSH５と並行しており、東－西である。列は風倒木（ピットの検出は不明瞭）や土壙（SK3）を挟み、４つで全てではないと想像する。

P62とP59の柱間距離は1.45m、P59－P67間は3.0m、P67－P64間は2.85mを測り、後２者間に一つずつ柱穴が存在したとすれば、列はほぼ等間隔に配置されていることになる。列の延長距離は7.3mで、おそらく６穴５間となるものであろう。

各柱穴の径は、検出面では34～63㎝、穴の底面では18～37㎝、検出面からの深さは13～40㎝を測り、底面の標高レベルは85.00～85.33mである。

柱穴覆土の遺物としては、P62から土師器・甕片が出土しているものの、やはり立柱に伴う掘削や埋土などに由来する流れ込みの可能性が強いと思われる。覆土は、黒色土であったり淡黒色土に黄色の粒を含んでいたりしていずれもよくしまり、P59やP67では穴の底面が突き固められたように硬化していた。また、P64の覆土を半截した土層観察では、穴の中央に直径11㎝を測る柱の痕跡を確認している。遺構の切り合い関係は、P60をP61とP62が切っており、P67はP68に切られる。P60やP68は、柱の立替えに伴うものであろう。

本柱穴列は、柱穴列1同様にSH5と並行して並ぶ状況から、SH5に伴ってこれと同時に存在したのではないかと推定される。

４．土壙ほか（図３・12・14、表４）

３号土壙（SK3）

調査区の南側・SB2とSB3の間（試掘段階の第３トレンチ内）で検出した。検出面では東西0.98×南北0.78mを測る台形プラン、深さは0.25mである。覆土は黒色土で、特に中央と底に近い部分がよくしまっていた。

P57を切っており、土師器６片と白瓷碗１片、山茶碗１片が出土している。この土壙の掘削により、柱穴列２を構成するピットの一つが消えている可能性が高い。本土壙は、柱穴列２ひいてはSH5より新しく、山茶碗片の時代である中世に所属するものであろう。しかし、その機能は不明である。

６号土壙（SK6）

３号土壙（SK3）の南に並んで検出された。検出面では東西1.05×南北0.58mを測る長方形プラン、深さは0.22mである。覆土は黒色土でよくしまっていた。土師器３片と須恵器３片、白瓷碗１片、山茶碗１片が出土しており、本土壙はSK3同様、山茶碗片の時代である中世に所属するものであろう。しかし、やはりその機能は分からない。

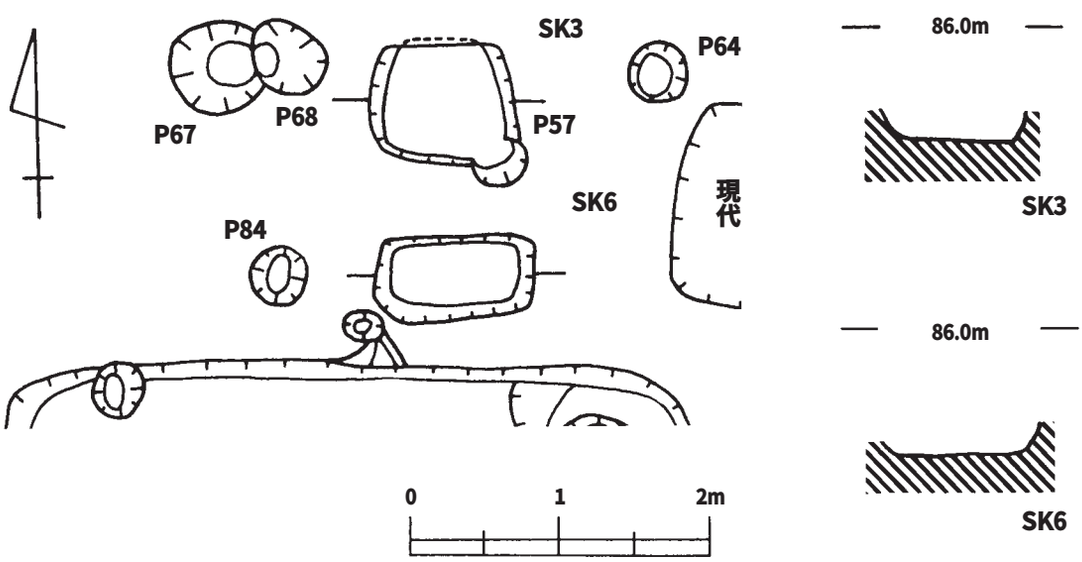

図12　３号・６号土壙実測図

風倒木痕（SX1、SX2、SK4）

調査区の北と南で、黒色土か暗褐色土を呈する３つの風倒木の痕跡を検出した。SX1は、黒色土でよくしまり１号住居址に切られている。これより遡る風倒木の痕跡であり、SX2とともに縄文土器片が出土している。SK4は暗褐色で、非常に堅くしまっている。３者ともに縄文期にできた痕跡と推定する。

現代の土壙（SK1・SK2・SK7・SK8）

現代の畑作に伴う作物保存用の土壙と考えられるものはSK1・SK2・SK7・SK8で、平面は1.5m内外の正方形や長方形、円形を呈している。深さは地山である黄色砂質土層にまで達するため、その覆土には黒色土に黄色土のブロックを多く含み、やわらかである。撹乱により、土師器や須恵器、白瓷、山茶碗などの細片を含んでいる。図14に示す23と24は、美濃山茶碗編年の大洞東１号窯期に属する山茶碗で、室町時代初期（15世紀前半）に当たるものである。

５．遺構に伴わない遺物（図14・表４）

調査区内の包含層や地表面から雑多な遺物が出土している。

図化できたものの詳細は図14と表４の遺物観察表に示すが、須恵器は８－９世紀代（35・36）、白瓷は大原２号窯期・10世紀前半（30・34）、山茶碗は美濃山茶碗編年の谷迫間２号窯期～明和１号窯期（12世紀前半～13世紀後半）と、時期的にも幅広い。また、北側の調査区を中心として縄文時代の遺物が散見され、石鏃（37）や石斧（38～40）が図化できた。石鏃は赤褐色チャート製、石斧は粘板岩製の当地域通有のものである。

表1　ピット一覧表（1）

番号	関連遺構	寸法（cm）			底面標高（m）	出土遺物	覆土	時期
		上端	底面	深さ				
1		(50×28)	(40×18)	20	85.56		黒色、しまる	古代か
2		27×24	14×15	37	85.40		黒色、軟らか	
3	SB1	28×30	20×19	64	84.97	土師（1）	黒色	古代
4		31×28	13×15	19	85.52		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
5	SH2	41×42	29×31	26	85.37	土師（1）	黒色に黄色細粒、しまる	古代
6	SB1	42×42	29×32	72	84.79		淡黒色に黄色粒、しまる	〃
7		24×29	17×19	24	85.30		淡黒色に黄色粒、軟らか	
8		27×33	14×15	22	85.30		淡黒色に黄色細粒、軟らか	
9	SH2	(14×36)	(9×26)	(29)	(85.41)	縄文（鉢1）	黒色、しまる	古代
10		32×33	20×20	24	85.40		淡黒色に黄色粒、しまる	〃
11	(SK1内)						黒色に黄色粒、軟らか	近現代
12	SH2	54×54	41×42	12	85.54		黒色に黄色細粒、しまる	古代
13		31×28	17×18	18	85.46		黒色に黄色粒、軟らか	近現代
14		47×30	17×9	23	85.42		淡黒色、しまる	古代
15	SH1	40×40	24×22	32	85.44	須恵（坏蓋A1、高坏1）	黒色、しまる	〃
16	〃	44×44	21×24	31	85.39	須恵（坏蓋A1）、縄文（鉢1）	黒色に黄色細粒、しまる	〃
17	SH2	38×37	19×22	44	85.20	土師（1）、須恵（坏蓋A1）	黒色、しまる	〃
18		28×26	14×13	47	85.18		黒色、しまる	〃
19	SH1	41×40	23×18	49	85.18	土師（甕1）、須恵（坏蓋A1）	黒色、しまる	〃
20		30×31	13×12	34	85.42	土師（甕1）	淡黒色に黄色粒、しまる	〃
21	SH1	40×38	14×15	52	85.16	土師（甕1）	黒色に黄色粒、しまる	〃
22		(15×28)	(11×19)	(16)	(85.63)		淡黒色、軟らか	
23		29×29	11×12	37	85.37		黒色、しまる	古代か
24	SH2	37×36	17×21	53	85.10		黒色、しまる	古代
25		27×(22)	13×(13)	18	85.54		淡黒色、しまる	古代か
26		(20)×40	(15)×23	41	85.23		黒色、しまる	〃
27	SH5	72×66	43×47	62	84.99		淡黒色に黄色粒、しまる	古代
28		(42×42)	(24×25)	14	85.45		黒色、軟らか	古代か
29	SH5	57×54	45×44	55	85.01	土師（甕1）	黒色、しまる	古代
30		35×32	19×19	30	85.33		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
31	柱穴列1	37×36	15×16	63	84.94	土師（甕1）	淡黒色に黄色粒、しまる	古代
32	SH5	50×47	30×31	63	84.92	土師（甕1）	黒色、しまる	〃
33	柱穴列1	50×(28)	30×(20)	65	84.92		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
34		49×52	30×34	38	85.28		淡黒色、しまる	〃
35	柱穴列1か	(35×35)	(24×17)	18	85.46	土師（甕1、焼塩1）	黒色、しまる	古代
36	SH2	35×35	21×21	41	85.23		黒色、しまる	〃
37		33×(27)	18×18	19	85.44		黒色、しまる	近現代
38	SH5	52×57	37×35	63	84.88		淡黒色に黄色粒、しまる	古代

表２　ピット一覧表（2）

番号	関連遺構	寸法（cm）			底面標高（m）	出土遺物	覆土	時期
		上端	底面	深さ				
39	柱穴列1	36×(50)	23×(40)	18	85.49		黒色、しまる	古代か
40		27×27	14×13	25	85.46		淡黒色、しまる	〃
41		27×29	19×18	18	85.49		淡黒色、しまる	〃
42	SH1か	30×29	15×11	34	85.32		黒色、しまる	〃
43	柱穴列1	27×30	17×15	28	85.35		黒色、しまる	〃
44		38×39	22×21	60	84.90		淡黒色に黄色細粒、しまる	古代
45		50×32	18×17	24	85.24		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
46	SH5	53×55	35×33	68	84.79		淡黒色に黄色粒、しまる	古代
47		58×36	26×17	23	85.23		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
48		32×29	20×17	13	85.37		淡黒色に黄色粒、しまる	〃
49	SH5	58×56	34×31	64	84.84		黒色に黄色粒、しまる	古代
50		(40)×35	(17)×18	31	85.14		淡灰黒色に黄色粒、しまる	古代か
51		(42×18)	(16×18)	(20)	(85.25)		黒色に黄色細粒、しまる	〃
52		33×36	13×8	20	85.30		黒色に黄色細粒、しまる	〃
53	SH4	46×46	13×10	31	85.12		黒色、しまる	古代
54	SH4か	54×72	18×20	32	85.11		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
55	SH4	41×42	30×14	32	85.12		黒色に黄色細粒、しまる	古代
56		72×50	50×28	15	85.25		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
57		(33×37)	(20×24)	(18)	(85.24)		淡黒色、しまる	〃
58		47×39	18×7	18	85.22		淡黒色、しまる	〃
59	柱穴列2	41×47	26×28	40	85.05		黒色に黄色粒、しまる	古代
60		(50)×87	(38)×66	15	85.26		黒色に黄色粒、しまる	古代か
61		60×90	25×28	28	85.14	山茶（碗1）	黒色に黄色粒、しまる	中世
62	柱穴列2	47×50	18×15	29	85.00	土師（甕1）	黒色、しまる	古代
63	SH3	49×43	24×20	42	84.98	土師（甕1）	淡黒色に黄色粒、しまる	〃
64	柱穴列2	37×39	25×24	21	85.24		淡黒色に黄色粒、しまる	〃
65	SH2	34×34	23×24	35	85.33		黒色、やや軟らか	〃
66		(15×34)	(5×14)	(20)	85.49		黒色、しまる	〃
67	柱穴列2	63×(63)	30×(37)	13	85.31		淡黒色に黄色粒、しまる	〃
68	柱穴列2か	54×43	19×18	14	85.47		黒色に黄色粒、しまる	
69	SH2	55×56	33×30	24	85.51	土師（甕1）	黒色、しまる	古代
70		56×54	23×15	40	85.33	土師（焼塩1、甕6）	黒色、しまる	〃
71	SH2	54×58	24×30	39	85.34	土師（焼塩1、他2）	黒色、しまる	〃
72	SB1	45×38	22×13	68	85.03		黒色に黄色粒、しまる	〃
73		35×30	20×19	56	84.94	土師（甕1）	淡黒色、やや軟らか	〃
74	SH4	43×42	14×17	64	84.84		黒色に黄色粒、しまる	〃
75	〃	37×38	27×26	53	84.97		黒色に黄色粒、しまる	〃
76		47×36	19×11	48	85.02		黒色に黄色粒、しまる	〃

表３　ピット一覧表（3）

番号	関連遺構	寸　法（㎝）			底面標高（m）	出　土　遺　物	覆　　土	時　期
		上端	底面	深さ				
77	SH4	45×39	19×18	28	85.16		淡黒色に黄色粒、しまる	古代
78		37×37	13×13	31	85.12		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
79	SH4	39×40	18×21	50	84.97		黒色、しまる	古代
80		36×30	17×18	17	85.29		黒色、しまる	古代か
81		46×43	27×19	46	85.02		黒色、しまる	〃
82		33×37	20×20	33	85.13		黒色に黄色粒、しまる	〃
83	SH5	53×56	31×27	80	84.67		黒色に黄色粒、しまる	古代
84		39×35	27×14	33	85.12		黒色、しまる	古代か
85		37×(28)	22×(19)	24	85.17		黒色に黄色粒、しまる	〃
86		35×36	17×17	43	84.98		淡黒色に黄色粒、軟らか	
87		32×43	13×13	22	85.20		淡黒色、軟らか	近現代
88		43×49	32×28	54	84.87		黒色に黄色粒、しまる	古代
89	SH3	47×47	27×25	47	84.99		黒色、しまる	〃
90		38×36	17×16	44	85.09		黒色に黄色粒、しまる	古代か
91		57×48	19×22	43	85.06	土師（2）	黒色、しまる	古代
92		39×32	22×17	17	85.38		黒色、しまる	古代か
93		38×32	11×11	41	84.98		黒色、しまる	〃
94	SH3	42×41	18×18	30	85.15		淡黒色、やや軟らか	古代
95		38×40	21×21	23	85.17		黒色、しまる	古代か
96		43×35	19×19	24	85.15		黒色に黄色粒、しまる	〃
97		43×38	25×16	41	84.98		淡黒色に黄色粒、しまる	〃
98		47×(24)	22×9	42	85.00		淡黒色に黄色粒、しまる	〃
99	SB3	29×28	9×10	46	84.73		黒色に黄色粒、しまる	古代
100	〃	37×36	17×17	50	84.71		黒色、軟らか	〃
101	〃	100×77	32×29	49	84.72		黒色に黄色粒、しまる	〃
102		38×35	23×15	26	84.92		黒色に黄色粒、軟らか	
103		59×(46)	27×19	12	85.07		黒色、しまる	古代か
104	SH5	61×63	31×35	40	84.82	土師（甕1）	黒色に黄色粒、しまる	古代
105		52×49	31×35	16	85.04	土師（甕1）	淡黒色に黄色粒、しまる	〃
106		35×39	19×22	39	84.79	土師（甕1）	黒色、しまる	〃
107	SH5	53×55	23×17	47	84.77	土師（甕1）	淡黒色に黄色粒、しまる	〃
108	〃	56×54	21×20	46	84.78		黒色に黄色粒、しまる	〃
109	〃	52×64	13×29	29	84.93		淡黒色に黄色粒、しまる	〃
110	SB2	32×28	13×13	10	85.09		灰褐色に黄色粒、しまる	〃
111	〃	23×26	10×14	10	85.12		灰褐色に黄色粒、しまる	〃
112	SH3	(30×35)	(20×28)	(11)	(85.09)		淡褐色、しまる	〃
113		49×50	18×20	47	84.76		淡黒色に黄色粒、しまる	古代か
114	SH5か	(40×52)	(20×33)	(18)	(85.01)		淡黒色、しまる	古代

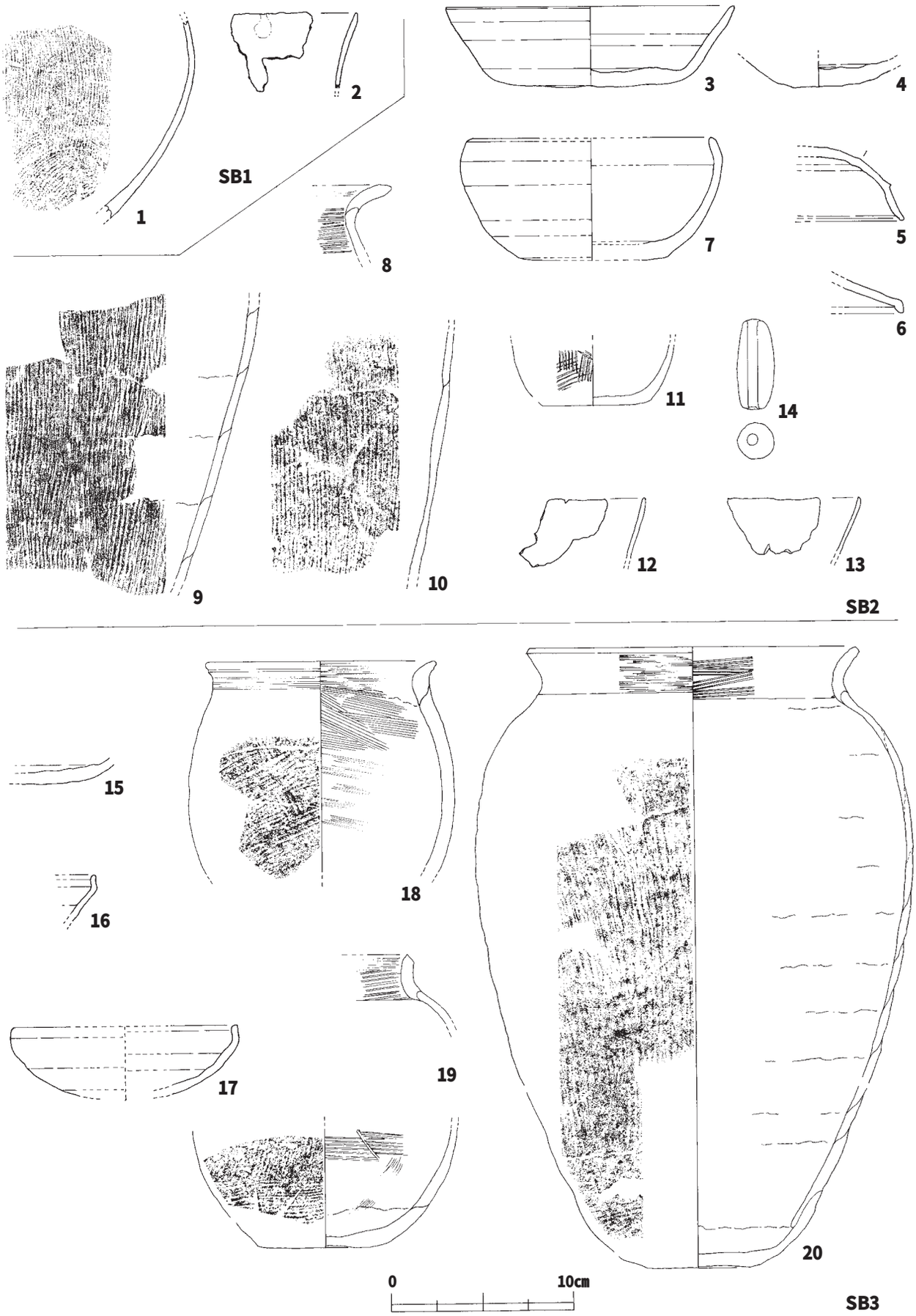

図13　出土遺物実測図（1）（S＝1：3）

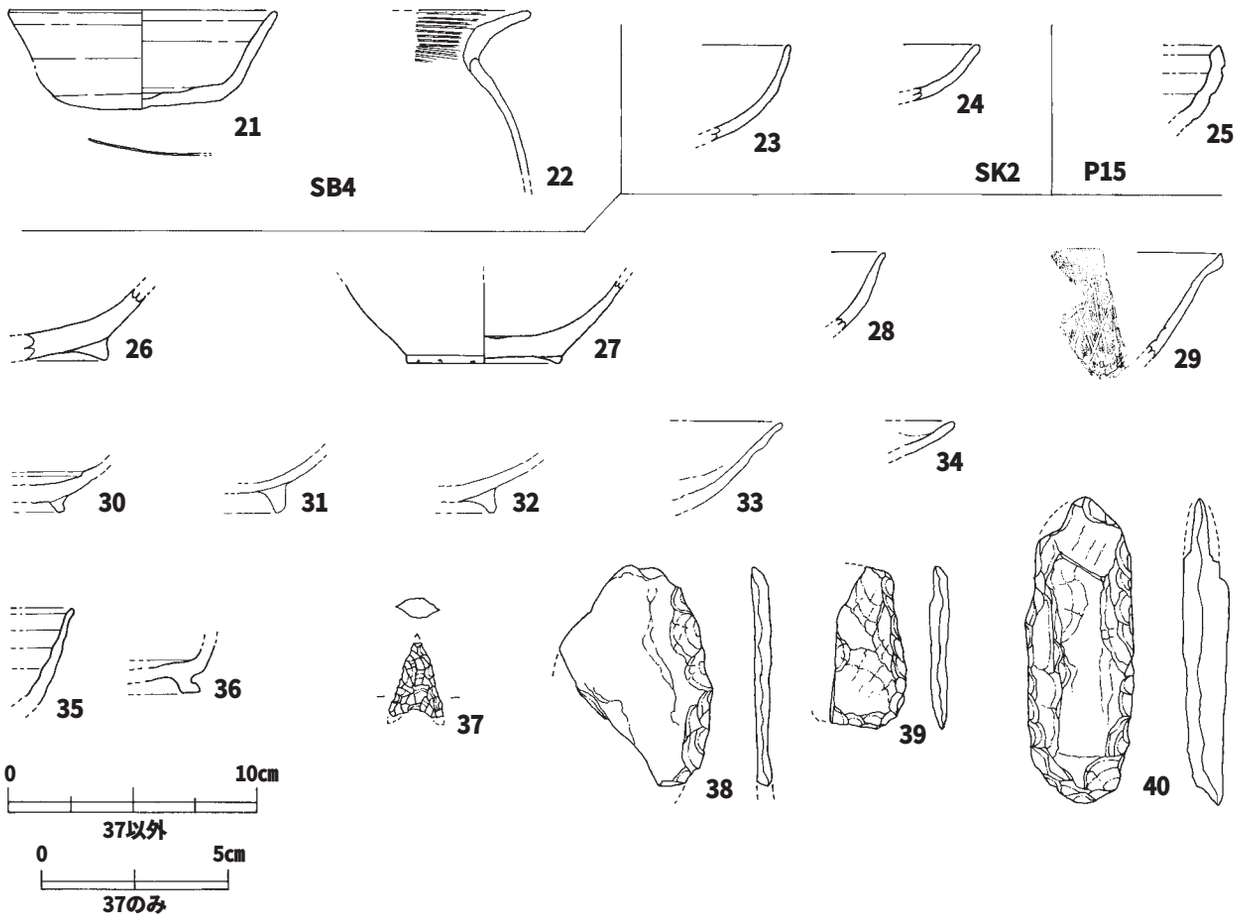

図14　出土遺物実測図（2）（S＝1：3　37のみS＝1：2）

表４　出土遺物観察表

（単位：cm）

No	遺物名称	出土位置	法　量（cm）	色　調	時　期	調整・特記事項
1	土師・甕	SB1T		褐色	7C中	外細いハケ、内ナデ　試掘
2	土師・焼塩	SB1F		黄褐色	7-8C	手捏ね、薄手、スス、こぼれ、試掘
3	須恵・坏C身	SB2F	口径復15.6、器高4.4、底径8.6	灰褐色	8C前	回転ヘラ切
4	須恵・坏A身	〃		濃灰色	6C	外面底部ケズリ
5	須恵・高坏蓋	SB2T		黒灰色	〃	外面上部ケズリ
6	須恵・坏D蓋	〃		灰色	8C	外面自然釉
7	須恵・鉢	SB2F	口径推12.9、器高6.7、底径推7.4	〃	8C前	静止ヘラ切
8	土師・長胴甕	SB2T		淡褐色	7-8C	外ハケ、内ナデ
9	土師・長胴甕	〃		褐色	8C前	外ハケ・スス、内ナデ・コゲ
10	土師・長胴甕	〃		灰褐色	〃	外ハケ・スス、内ナデ・コゲ
11	土師・小型甕	SB2F	底径5.8	淡褐色	7C末	外ハケ・スス、内ナデ、平底
12	土師・焼塩	〃		黄褐色	7-8C	手捏ね、薄手
13	土師・焼塩	SB2T		灰褐色	〃	手捏ね、薄手
14	土師・土錘	SB2F	長4.9、最大径2.0、孔径0.5	乳白色		管状
15	須恵・坏C身	SB3F		淡褐色	8C	ヘラ切
16	須恵・鉢か	〃		濃灰色	〃	
17	須恵・鉢	〃	口径推12.1	淡灰色	〃	
18	土師・小型甕	SB3K	口径復12.4、胴径復14.5	褐色	7C末～8C初	外ハケ・スス、内ナデ・コゲ
19	土師・小型甕	SB3K・P	底径6.3	黒褐色	〃	外ハケ・スス、内ナデ・コゲ、平底
20	土師・長胴甕	SB3K	口径復17.7、器高復34.0、底径5.4	淡褐色	〃	外ハケ・スス、内ナデ・コゲ、平底
21	須恵・坏B身	SB4F	口径復10.5、器高4.0、底径5.0	灰色	8C前	ヘラ記号か、ヘラ切
22	土師・甕	〃		濃褐色	7C末～8C初	外ハケ・スス、内ナデ・コゲ
23	山茶・碗	SK2		淡灰色	大洞東1	試掘
24	山茶・碗	〃		〃	〃	試掘
25	須恵・高坏か	P15		灰色		
26	山茶・碗	西隣表採		淡灰色	谷迫間2	回転糸切　試掘
27	山茶・碗	〃	高台径復6.0	淡褐色	丸石3	〃　試掘
28	山茶・碗	〃		灰褐色		試掘
29	山茶・碗	〃		灰色	明和1	オロシ碗　試掘
30	白瓷・碗	1T		淡灰色	大原2	
31	白瓷・碗	〃		〃	〃	
32	白瓷・碗	西隣表採		〃	〃	試掘
33	白瓷・碗	1T		〃		
34	白瓷・小皿	〃		〃		
35	須恵・坏D身か	西隣表採		黒灰色	8－9C	試掘
36	須恵・坏B身	〃		濃灰色	〃	試掘
37	打製石鏃	SB1掘型	長（2.0）、幅（1.5）、厚0.5	赤褐色	縄文	チャート
38	打製石斧	SB1F	長（8.8）、幅（6.2）、厚（0.6）	黒灰色	〃	粘板岩（変成）
39	打製石斧	西隣表採	長（6.5）、幅（3.0）、厚（0.7）	〃	〃	粘板岩
40	打製石斧	SB1掘型	長12.3、幅4.3、厚1.9	濃灰色	〃	〃

SBIT：SBIの床、SBIF：SBIの覆土、SB3K：SB3のカマド

第4節　ま　と　め

狭い面積の調査ではあったが、今回、川合東野遺跡の内容の一端が判明したことは意義深い。今回の調査では、推定と推察により７世紀中頃の竪穴住居址１棟（SB1）と７世紀末～８世紀初頭の竪穴住居址１棟（SB3）、８世紀前半の竪穴住居址２棟（SB2・4）、平安時代の掘立柱建物址２棟（SH1・2）、古代～中世の掘立柱建物址３棟（SH3・4・5）、SH5に付属する柱穴列２列、中世の土壙（SK3・6）などが検出された。また、遺構は見つからなかったが縄文時代の遺物も散見された。内容の詳細が不明であった東野遺跡は、縄文時代～中世に至る複合遺跡と見て差し支えないであろう。

各遺構に伴って出土した遺物は比較的貧弱であったが、いくつかの特徴ある遺物が見つかっている。一つは、SB1とSB2から出土した焼塩土器である。これは、知多半島の付け根辺りからおそらく木曽川を遡って当地へもたらされたであろう荒塩を、焼き塩により塩化マグネシウムをとばし、固形塩を生成する過程において使用した当地の土器である。当所可児市の川合地区は木曽川と飛騨川の合流点左岸にあり、「川合湊」で荷下ろしされた荒塩の流通中継地点であったものと推定する。

この焼塩土器は、川合宮之脇遺跡A地点の調査においても後Ⅴ期（７世紀前半）～Ⅹ期（８世紀末）にかけて、多くの住居址から出土している。原位置を保つものを見れば、住居址のカマド跡から出土することが多く、この焼き塩工程が住居内のカマドで行われたことが明白である。自己消費のためだけでなく、川合地区からの二次流通においては、焼き塩工程を終えた固形塩として各所へ流通していったのではないかと推察されよう。

二つ目には須恵器の器台がある。図版９に示したが、同一個体とみられる脚部の破片がいくつもSB2の床面近くから出土した。６世紀前半のものであり、脚部は凹線によって区切られて交互に透かし孔を有し、全体で６段はある。紛れ込みによる遺物と判断はしたものの、古墳ではなく集落址からの出土とすれば見過ごし難いものであり、かつ市内では当該期の須恵器・器台の出土は初例である。

古墳時代～奈良時代、ひいては中世に至る集落址は、付近では川合宮之脇遺跡だけでなく当遺跡と西に隣接する川合遺跡でも見つかっている。今回調査した川合東野遺跡が、川合遺跡と一連の集落址であることも十分予想できるが、ここから東方向へどのくらい広がりをもつのかが大きな課題となる。

今もなお、木曽川の眺めは四季折々に安らぎを与えてくれるが、古代においては先ずもって交通の大動脈として地域の生活文化と直結したものであり、河畔には必然的に集落が形成され、そして集落として成長していった。製塩土器や焼塩土器の出土が集中する木曽川両岸における集落遺跡の例を見るにつけ、これらの集落は物流の拠点として地域の中核的な集落との関係を深め、強めていったのであろう。

調査地全景（南から）

重機による掘削（東から）

第３トレンチ掘り下げ作業（東から）

第１トレンチ完掘後（西から）

第２トレンチ完掘後（北から）

第３トレンチ完掘後（西から）

図版　２

第１トレンチ
SB1　検出状態（北西から）

南調査区遺構上面
検出状態（西から）

北調査区完掘状態
（東から）

南調査区
完掘状態（西から）

SB1　完掘後（東から）

SB1　断面（南東から）

図版　4

SB2（奥）と SH5
完掘後（東から）

SB2　完掘後（東から）

SB2　東側覆土断面（南から）

SB2　西側覆土断面（北から）

SB3　完掘後（東から）

SB3　覆土断面（北から）

SB3　貯蔵穴（手前）と北東主柱（北から）

SB3　カマドの痕跡（北から）

図版　6

SB4　完掘後（南西から）

SH1　完掘後（南東から）

SH2　完掘後（南東から）

SH3　完掘後（南西から）

SK6　断面（北から）

SH4　完掘後（南西から）

SH5　完掘後（東から）

P49　断面（東から）

図版　8

土師器　甕１（SB1）

焼塩土器２（SB1）

須恵器　坏C身３（SB2）

須恵器　鉢７（SB2）

土師器　小型甕 11（SB2）

土師器　長胴甕９・８・10（SB2）

土錘　14（SB2）

焼塩土器12・13（SB2）

須恵器　高坏蓋５（SB2）

須恵器　器台（SB2）

須恵器　坏類４・６（SB2）

土師器　小型甕18（SB3）

図版　10

須恵器　坏15、鉢16・17（SB3）

土師器　小型甕 19（SB3）

土師器　長胴甕 20（SB3）

須恵器　坏B身 21（SB4）

土師器　甕22（SB4）

山茶碗　23・24（SK2）

打製石斧38・40・39、打製石鏃37

須恵器　高坏か 25（P15）

白瓷　碗30・31・33、皿34（第１トレンチ）

山茶碗28・29、須恵器類36・35（表採）

山茶碗　26・27（表採）

報　告　書　抄　録

ふりがな	かわいひがしのいせき
書　　名	川合東野遺跡
副書名	
巻　　名	
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ番号	40
編集者名	長瀬治義・吉田正人
編集機関	可児市教育委員会
所在地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目1番地
発行年月日	西暦2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 面積	調査原因
かわいひがしのいせき 川合東野遺跡	かにしかわいあざひがしの 可児市川合字東野 2791番242	21214	07505	35° 26′ 34.2″	137° 03′ 36.6″	20041121 ～ 20041218 330㎡	アパート建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川合東野遺跡	集落	古代	住居址と掘立柱建物址	須恵器、土師器、焼塩土器	木曽川沿岸における塩の流通

可児市埋文調査報告 40

書　　名　川合東野遺跡

平成20年３月28日　印刷
平成20年３月31日　発行

編集・発行　可児市教育委員会
〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目1番地
Tel 0574-62-1111　Fax 0574-63-6751

印　　刷　丸理印刷株式会社